

依頼談話における言いさし表現 「けど」に関する考察 —機能と負担度に着目して—

小此木江利菜*

(e-mail : kor.m1610@gmail.com)

<目次>

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 結果と考察 |
| 2. 先行研究と本稿の立場 | 4.1. 談話構成別「けど」 |
| 2.1. 先行研究 | 4.2. 依頼の負担度別「けど」 |
| 2.2. 「けど」の機能 | 4.2.1. 負担度の大きい依頼 |
| 2.3. 「依頼」の定義と範囲 | 4.2.2. 負担度の小さい依頼 |
| 3. 研究の対象と方法 | 5. まとめと今後の課題 |

キーワード：言いさし(interrupted speech), けど(kedo), 依頼(request), 談話(discourse), 負担度(burden)

1. はじめに

言いさし表現とは「ちょっと、お願いがあるんだけど…」のように、文末を最後まで述べずに発話をする日本語のコミュニケーション方法の一つであり、外国人日本語学習者(以下、学習者と称する)にとって、日本語の言いさし表現は習得が難しい表現とされている(山本,1989)。

日本語母語話者が文末に「～んですけど/が」など言い切りの形を取らない発話が多い(柏崎,1993)理由として、日本人のコミュニケーションは、多くを語るのではなく行間を読みながらお互いの共通基盤の上でテンポよく話すためである(荻原,2000)。それに

* 高麗大学院、中日語文学科博士課程、日本語学教育専攻

対し、学習者は「お願いがあります」のように文末に言い切りの形を多用する傾向があり(小池,2000)、日本語母語話者と学習者の間には文末表現の相違点があるといえる。これらのことから、日本語母語話者の談話から見られる言いさし表現の使用様相や機能を分析することで、学習者がより円滑な日本語のコミュニケーションをとれる一助になると考えた。

そこで本稿では、日本語母語話者の談話資料から言いさし表現を取り上げ、使用様相と機能について検討する。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1. 先行研究

言いさし表現に関する研究は大きく2つに分かれる。言いさし表現全体の談話機能に関する研究(岡田,1991、猪崎,2000、槌田,2003、曹,2004)と、言いさし表現の「けど」「から」「が」「て」のような、特定の形式を対象にした研究(三原,1995、白川,1996、曹,1998、田,2013、何,2018)である。

言いさし表現の機能に関して三原(1995)は「依頼、欲望や断りなど特定の言語行為と結びつき、聞き手に何らかの負担をかける場合に使われる」とし、白川(1996)では、言いさし表現の終助詞的な「けど」¹⁾は「聞き手の認識状態を替えて結果的に何らかの行動を促そうという態度」を示していると述べている。

また、槌田(2003)では日韓の依頼談話を対象に言いさし表現の使用率と表れた結果を機能別に分類し分析を行った。その結果、日本語母語話者間で言いさし表現の使用率が高く、その中でも特に依頼遂行の前段階(前置き)において「情報提供」の機能をもつ言いさし表現が多く使用されていることを明らかにしている。また、猪崎(2000)では依頼場面を対象にした文末表現の調査を行い、日本語母語話者の依頼場面で「～んだけど」を含めた言いさし表現が多く使われることを報告している。

これらのことから「けど」は、文末に付け加えることで「聞き手に何らかの行動を促す」機能があるため、依頼談話で多用されることが推測できる。三原(1995)の言及通り「けど」は、依頼表現と結びつきやすいと同時に聞き手に負担をかける場合に使

1) 白川博之(1996)は「ケド節」と称している。

用されるにも関わらず、依頼談話で表れる「けど」を対象にした分析と、それらを依頼の負担度別に考察した研究は管見の限り見当たらない。また、依頼談話で表れる「けど」は話し手が展開する談話内での発話位置により、その機能に違いが出てくると考えた。

そこで本稿では依頼談話を対象に、観察された「けど」を分析し、談話構成別機能と負担度に焦点を当て考察する。本稿の目的を整理すると以下の2点である。

- 1) 依頼の談話構成別に表れた「けど」の機能を明らかにする。特に、前置きと本題における「けど」の機能の違いを中心に考察する。
- 2) 依頼の負担度別「けど」の使用様相と機能を明らかにする。

2.2. 「けど」の機能

水谷(1989)は「けど」が含まれる言いさし表現²⁾は「自分の発話を完全なものとして言い尽くしてしまわずに、相手にその先を言わせようとする」機能があるとしている。また、三原(1995)では「けど³⁾」が発話内で表れる場合「聞き手に対し、話し手の意見や願望、また聞き手にとって行動を起こすきっかけとなるような情報を提示し“どうですか”“いかがですか”“どうしましょうか”等のニュアンスを相手に与える用法で使われる」ことが多く、このような用法を「相手伺い用法」と称している。

一方、三原(1995)では「けど」は「聞き手がその行為を行なうための判断材料となるような情報を提示するのみ」の場合もあり、この機能に関して白川(2009)は「参照情報の提示」という機能に分類している。また、田(2013)においても「けど」は「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」2つの機能があると説明している。これらの言及から「けど」の全てが必ずしも相手伺いの機能をもつのではなく、談話内で「けど」が生じる位置により、その機能に違いがあるといえる。

三原(1995)、白川(1996)、何(2018)では「けど」の機能を大きく「情報提供」と「情報要求」に分けている。この機能の分類を参考に、本稿の研究目的に合わせ以下4つの機能に分類した。

2) 水谷(1989)では「省略」(Leaving unsaid)と説明している。

3) 三原(1995)では「ケレドモ文」としている。

<表1> 「けど」の機能内訳

機能		例
情報提供	①事実を述べる	「〇〇予定だったんだけど」 「〇〇て言ったんだけど」
	②発話の切り出し	「すごい急なんだけど」 「お願いがあるんだけど」
	③情報補足・断定回避 ⁴⁾	「謝礼は出るんだけど」 「3時間かかるんだけど」
情報要求	④意見・判断を求める(相手伺い) ⁵⁾	「〇〇さんが時間がある時でいいんだけど」 「代わりに行ってほしいんだけど」

2.3. 「依頼」の定義と範囲

「依頼」とは「～ていただけますか?」「～てもらえますか?」などのような言い切りの文末表現を入れて、相手に何かしらの行為を促す表現である。依頼表現の中で、文が最後まで完成されず文末に「けど」を付けた「～してほしいんだけど」のような表現は、聞き手の誠実性に働きかけることによって依頼としての役割を果たしている(山田,2004)。

依頼行為は聞き手(被依頼者)に負担をかけるものであり、依頼された行為を実行するかどうかは聞き手の自由意志・判断に関わるわけで、話し手(依頼者)はこれを聞き手に強制することはできない(猪崎,2000)。また、蒲谷、他(2009)では「依頼⁶⁾」とは「自分の利益になることを相手の行為による行動によって実現しようとするために行われる」と話し手と聞き手の利益関係から説明している。しかし「依頼」は「聞き手にある行動を促す」部分で「命令」や「勧誘」などの文末表現と類似しており、聞き手の受け取り方により判断がしづらい表現である。そこで、蒲谷、他(2009)では、行動展開表現としての依頼を「行動・決定権・利益」の3つの観点から整理している。蒲

4) 三原(1995)では、自分の考えや意見を表す表現「～と思う」自分の意見を表すと同時に、相手の意見・考え等を聞くニュアンスを与えることになり、断定を避ける表現効果が生じ、相手伺いに枠組みとして捉え考察している。三原(1995)の言及に基づき「そんなに大変な実験じゃないと思うんだけど」のような発話は「断定回避」の枠組みに含め分析を行う。

5) 三原(1995)によると、話し手が聞き手のために行った行為を伝え、そのことに対して話し手はどうするのか文字通り判断を求めている。また、判断求めの中には客観的に情報を提示し聞き手に判断を求める場合もあると述べている。

6) 蒲谷他(2009)では「依頼行為」としている。

谷、他(2009)によると、依頼を受け行動するのは聞き手であり、依頼に対する決定権も聞き手にあるとしている。また、依頼の後の結果利益は話し手(依頼者)にあると定義付けている。本稿では、蒲谷、他(2009)の規定に従い分析を行う。

また、キ(2004)の定義をもとに依頼の談話構成を大きく「前置き」「本題」「終結」の3つに分類し分析を行う。理由としては、依頼が遂行される前段階である「前置き」があるのは日本語母語話者の特徴であり(猪崎,2000)、キ(2004)においても、前置きは「依頼の意図を相手に伝えようとする」「相手と話ができるような機会を作り、情報を獲得する」などの方略が含まれており、この部分では主に依頼に関係する話が行われるのではなく、相手に関する一般的な情報を獲得して相手と話が続けられるような機会を作るための発話が含まれると説明している。このことから前置きは本題部分と分類して分析する必要があると判断した。

本稿では、キ(2004)で提示されている依頼の談話構成の枠組みをもとに詳細を分類し、以下<表2>に整理した。

<表2> 依頼の談話構成

談話構成	内訳	例
前置き	あいさつ 呼び掛け 事情説明 事情尋ね	「久しぶり」 「今、大丈夫？」 「〇〇の××に行けなくなって」 「〇〇さん、明日時間ある？」
本題	依頼	「～もらえる？」 「～してくれない？」 「～できるかな？」
終結	話題の切り替え 聞き返し お詫び・お礼 あいさつ	「話変わるんだけど」 「なんで？」 「どうして？」 「ごめんね」「ありがとう」 「また、連絡するね」「じゃあ、またね」

柏崎(1993)では、本題にあたる部分では「発話末を言い切らず、聞き手に用件を察してもらう」表現が多いと言及しているため「本題」部分では「けど」を含めた言いさし表現が多く表れる可能性が高い。

また、槌田(2003)では日本語母語話者は「前置き」を相手への負担度や上下関係によって使い分けるとしており、このことから負担度の大小により前置きで表れる「けど」にも差が生じると推測できる。

3. 研究の対象と方法

本稿では、18歳～26歳の大学生・大学院生男女40名の依頼談話における言いさし表現「けど」の使用様相を調査する。調査資料は『BTSJによる日本語話し言葉コーパス2020年版⁸⁾』に集録されている日本語母語話者同士の電話会話資料を利用し分析を行う。場面を設定した電話会話は談話構成を分類しやすく、また、電話会話以外の依頼談話で表れる場面に対応したものであると判断した。なお、関係は親しい友人の関係である。

依頼の負担度は、黄(2015)であげられている「依頼における心理的負担⁹⁾」を基準に大小2つの依頼内容を選定した。依頼の負担度を大小2つに区別するためにコーパスから2つの電話会話を取り上げた¹⁰⁾。「負担度が大きい依頼」の主な内容は「明日、ボランティアで3時間ほど言語調査の会話録音を依頼者の代わりに行く」という依頼であり「負担度が小さい依頼」は「依頼者(親しい友人)とペアになり言語調査のために会話の録音をする、時間指定は無く謝礼が出る」という依頼内容である。なお、コーパスの文字起こしの際の誤字や脱字はそのまま反映した。

4. 結果と考察

4.1. 談話構成別「けど」

依頼談話における「けど」の使用様相と負担度別機能をBTSJコーパスを用い調査を行った。まず、談話構成別発話数から「けど」の出現率を比較した。結果をまとめると以下<表3>の通りである。

7) 「けど」は「けれど」「けれども」と語彙的には異なるが、本質的には同一な意味を持つため、調査対象に含め分析を行う。白川(2009:16)においても、「けれど」「けれども」の形を変異体(variant)と捉え「けど」に含めた考察の対象としている。

8) 以下、「BTSJコーパス」と称する。

9) 負担度に関して、黄(2015:23)では、「時間」「移動」「金銭」などといった条件において、誘う側と誘われる側両者にかかる心理的負担を基準としている。本稿では、黄(2015:23)が定義した負担度に従い、依頼内容を選定した。

10) 本稿では依頼の大小を区別するために、BTSJコーパスから「04.女性同士の断りの電話会話」の依頼者の発話、「05.同性同士の依頼を含む電話会話」の依頼者の発話を取り上げた。

<表3> 談話構成別 「けど」 結果

	全発話数	「けど」	「けど」出現率
前置き	346回	62回	18%
本題	659回	113回	17%
終結	525回	13回	2%
計	1530回	188回	12%

依頼談話における「けど」を談話構成別に見ると、前置きで346回中、62回(18%)、本題は659回中、113回(17%)、終結では525回中、13回(2%)表れた。出現率を見ると「前置き」と「本題」で表れた「けど」の割合が類似している。三原(1995)は「けど」は依頼表現と結びつきやすいと述べていたが、本題では依頼を本格的に遂行する発話が主な内容であるため、そこで依頼表現が多用された結果「けど」が多く表れたと考えられる。しかし「前置き」に関しては、主に依頼に関する話が行われるのではない(キィ,2004)ため、「前置き」で「けど」が「本題」と同じように表れたことに関しては「けど」を機能別に見る必要がある。次に、観察された「けど」を「情報提供」と「情報要求」に分け分析した。結果は以下の通りである。

<表4> 依頼談話における「けど」機能別

	前置き	本題	終結	計
情報提供	61	76	11	148
情報要求	1	37	2	40
計	62	113	13	188

(単位:回)

観察された「けど」を機能別に見ると「情報提供」が148回、「情報要求」が40回表れた。槌田(2003)の先行研究においても、依頼談話の前置きで「情報提供」の言いざし表現が「情報要求」より多いことを報告している。その理由として「日本人が相手の内側に立ち入るのをつつしむ」と文化的な背景から考察しており、この要因が使用率に影響を及ぼすと言及している。すなわち「情報要求」が聞き手の内側に立ち入ると捉える一方、「情報提供」は「どうですか?」のような提案に留まり、判断や決定権を相手に与えるため、それ以上聞き手の内側に踏み込まない発話であると捉える。本調査から「情報提供」の「けど」が「情報要求」より多く表れたことも、槌田(2003)であげられた要因が関係して

いると考えられる。

本題においても「情報提供」が76回、「情報要求」が37回表れ「情報提供」の「けど」が多く見られた。まず、表れた「情報提供」の例を以下に示す。

<表5> 例1

No.	発話者	発話内容	機能
28	JFY006	うんー、そっか、うんーと。	
29	JFB006	はい。	
30	JFY006	<笑い>何時ぐらい<なの?><{<}>。	
31	JFB006	<あのう><{>}>、朝の9時なんですけど。	情報提供
32	JFY006	あ、そうなんですか<笑いながら>[声が小さくなる]。	

<例1>は、発話[31]で[JFB006]が「朝の9時なんです」という言い切り表現を使用せず「朝の9時なんですけど」のように「けど」を文末に付け発話を終わらせている。「けど」は聞き手に何かしらの行動を促す機能があると同時に、三原(1995)で説明されていた「聞き手にとって行動を起こすきっかけとなるような情報を提示し、“どうですか”“いかがですか”“どうしましょうか”等のニュアンスを相手に与える」機能がある。本題で情報提供の「けど」が多く使用された理由は、情報を提供すると同時に聞き手に「この発話が依頼であること」を「けど」を通して汲み取ってほしいという話し手の意図があるのではないかと考えられる。次に「情報要求」の例を以下に示す。以下は、本題で表れた例である。

<表6> 例2

No.	発話者	発話内容	機能
44	JFB006	あの一、国立国語研究所っていうところで、(はい)言語調査に関する実験に参加する予定だったんですよ、私が。	
45	JFY006	はい。	
46	JFB006	で、それに行けなくなっちゃったんで、	
47	JFY006	はい。	
48	JFB006	あの、もしよかったら代わりに、行っていただけたりしたらなあと思うんですけど。	情報要求
49	JFY006	国立研…<笑いながら>。	
50	JFY006	えっ、それはなん、なんか…<笑いながら>。	

「けど」の機能に関して白川(1996)では、話し手は「けど」を使って積極的に相手に何かの行為を求めることはできないと言及している。上記した例の発話[48]では「行っていた

だけたりしたらなあと思うんですけど」と「けど」を付け加えることにより、暗示的に相手に伺いを求めていることがわかる。日本語母語話者は、例であげた「～と思う」や「～してほしい」といった願望を表す表現を使用し、間接的に相手に伺いを求める。情報要求の「けど」は、他にも「手あたり次第電話してらって感じなんですけど」や「できればなんかその人と一緒に行ってもらったりしてほしいんですけど」などの発話が見られた。蒲谷、他(2009)では、依頼の願望表現に関して「直接的な依頼表現よりも間接的になるため、当然性¹¹⁾が低い依頼のときにはより効果的である」としている。つまり、聞き手にとって必要性がない依頼の場合「～してほしい」のような願望表現を使用することで依頼自体の負担を軽減させている。実際に「情報要求」の「けど」を見ると、多くの例が願望表現と共起していたが、「情報要求」の用例が少なかったこともあり、今後さらに多くのデータとより詳細な分析が必要であるため次の機会に考察したい。

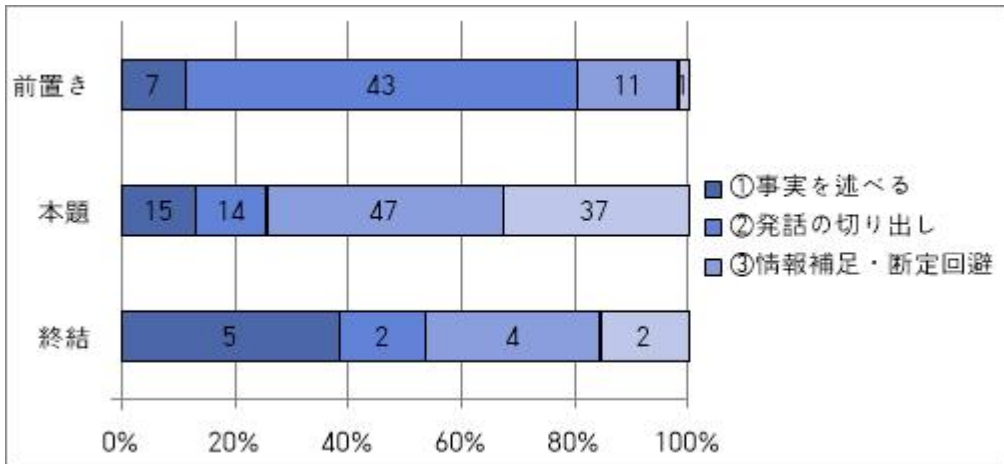
次に、機能別に分類した結果を以下<表7><図1>に示す。

<表7> 談話構成別「けど」機能

機能	内訳	前置き	本題	終結	計
情報提供	①事実を述べる	7 (11%)	15 (13%)	5 (14%)	27 (14%)
	②発話の切り出し	43 (69%)	14 (12%)	2 (14%)	59 (32%)
	③情報補足・断定回避	11 (17%)	47 (42%)	4 (14%)	62 (33%)
情報要求	④意見・判断を求める	1 (2%)	37 (33%)	2 (14%)	40 (21%)
計		62 (100%)	113 (100%)	13 (100%)	188 (100%)

(単位:回)

11) 蒲谷、他(2009)によると「当然性」とは聞き手が「どうして私に頼むのだろうか」と話し手の行動の意味がわからないなど依頼に当惑することを言い、コミュニケーション主体にとって行動展開表現が当然か、当然ではないかのことでありとしている。当然性が高い行動展開表現は受諾されやすく、当然性が低い行動展開表現は断られやすいと説明している。



<図1> 談話構成別 「けど」 機能

前置きでは「発話の切り出し」が最も多く43回(69%)見られ、本題では「情報補足・断定回避」が47回(42%)、終結では「事実を述べる」が5回(14%)観察された。

この結果から、前置きで表れる「けど」は「発話の切り出し」機能をもつ「けど」が多く、本題では「情報補足・断定回避」の「けど」が多用されることがわかった。

蒲谷、他(2009)では、話し手が談話を展開する際に、聞き手が「相手(話し手)の話を聞いているうちに、話の内容に納得し、結局、依頼を引き受けることになる」場合や「一旦は断ろうと思っても、相手(話し手)の説得を聞いているうちに関係性を見出し、結局、引き受けることになった」というような聞き手の心理変化に関する言及もあり、依頼談話における「けど」の「発話の切り出し」機能の重要性が伺える。また「意見・判断を求める」機能は、前置きで1回のみ観察され、この部分では相手に「意見・判断を求める」相手伺いの「けど」はあまり見られなかった。前置きは主に「この後の発話が依頼であることを相手に察してもらう」話し手の意図があるため、意見・判断を求める「けど」が表れづらいと考えられる。

一方、本題では「情報補足・断定回避」が47回(42%)と最も多く、続いて「意見・判断を求める」が37回(33%)観察された。特に「意見・判断を求める」機能は前置きではほとんど見られなかったが、本題での使用率が高いことがわかった。最も多く表れた「情報補足・断定回避」の例を以下に示す。

<表8> 例3

No.	発話者	発話内容	機能
20	JFSa001	にっ、9時に着いてなきゃいけないの?。	
21	JFB001	9時から3時間ぐらい。	
22	JFB001	しかもボランティアなんですけど。	情報補足・断定回避
23	JFSa001	交通費も?。	
24	JFB001	出ません、くー[申し訳ない様子]。	

<例3>は本題で観察された発話である。曹(1998)では「けど」の断定回避¹²⁾に関して、不確かな情報であるという含みをもたせるように断定を回避する機能をもつとしている。発話[22]で見られた「しかもボランティアなんですけど」という発話で「しかもボランティアなんです」という言い切りの形ではなく「けど」を付け加えることにより、依頼内容が「ボランティア」という聞き手に対して言いづらい内容を不確かな情報であるという含みをもたせ断定を回避していることがわかる。と同時に「けど」を使用することにより、逆接のようなニュアンスになり後件に何かしらの発話をするような含みももたせているのではないかと考えられる。「ボランティアなんですけど、(交通費は出ます)」のような、逆接のニュアンスで断定を回避することにより、聞き手が感じる負担を軽減させようとしていると捉えることができる。

4.2. 依頼の負担度別「けど」

依頼の負担度別に「けど」の使用様相を分析した。結果は以下の通りである。

<表9> 負担度別「けど」

	前置き	本題	終結	計
負担度(大)	55	74	3	132
負担度(小)	7	39	10	56
計	62	113	13	188

(単位:回)

<表9>を見ると、負担が大きい依頼では132回、負担が小さい依頼では56回「けど」が観察された。

談話構成別に見ると、前置きでは負担が大きい依頼では55回、負担が小さい依頼では7回表れた。前置きで表れる発話の特徴に関して三井(1997)では、依頼を行なう前の言語行動は、発話者の方向性を示唆するもので、依頼の具体的負担を軽減させることにおいて有効であると指摘している。負担度が大きい依頼で「けど」が多く見られた理由も、これから本題で遂行する依頼の負担度を軽減させようという話し手の心理によるものだと考えられ

12) 曹(1998)では「発話断定回避」として説明している。

る。実際に、キイ(2004)においても「前置き部分で展開する「事情説明・事情尋ね」を上手に言うことで、相手の厚意がわいてくること」もあり、また、そのような方法を取り「間接的に依頼の意図を伝えようとしているので、相手にかかる負担が減少する」としている。そのため、依頼の負担度が大きくなるほど「けど」の使用率が高い結果になったと考えられる。

本題においては、負担が大きい依頼では74回、負担が小さい依頼では、39回観察された。三井(1997)では、前置きに限り依頼の負担を軽減させる機能があると説明していたが、本題においても「聞き手に対する負担を軽減させたい」話し手の意図から、負担が大きい依頼で「けど」の出現率が高く表れたのではないかと考えられる。

終結では、負担が大きい依頼が1回、負担が小さい依頼が10回観察された。負担度の大小に関わらず、終結での「けど」が前置きや本題に比べ使用されにくい傾向が見られた。理由としては、依頼の遂行が終わった段階で「けど」を使用し聞き手に負担を与える必要がないためである。観察された「けど」は、話題が切り替わった後に出てきた新しい話題で表れたものである。例を挙げると「いや、土曜日子バイトでちょっと、部活に行けないんで、あれなんですけど」のような発話である。終結部分で表れた「けど」の特徴に関する考察は用例が少なかったこともあり、今度の課題としたい。

4.2.1. 負担度の大きい依頼

黄(2015)で定義付けている依頼負担度の条件において「時間」「移動」「金銭」の3つに制約がある依頼は負担度が大きいといえる。負担が大きい依頼は、前置きでは55回、本題では74回、終結では3回表れ、機能別に見ると「発話の切り出し」が44回と最も多く、続いて「情報補足・断定回避」が43回表れた。

<表10> 負担(大)「けど」

機能	内訳	前置き	本題	終結	計
情報提供	①事実を述べる	7	12	1	20(15%)
	②発話の切り出し	36	8	0	44(33%)
	③情報補足・断定回避	11	30	2	43(33%)
情報要求	④意見・判断を求める	1	24	0	25(19%)
計		55	74	3	132(100%)

(単位:回)

負担が大きい依頼の方略に関してキイ(2004)では「依頼の理由及び自分側の依頼の必要性を相手が納得できるように述べる」特徴があるとし、また「唐突な感じを与えないため、依

頼しようとした段階で相手の様子を見て、状況を尋ねることにより、相手に心の準備をさせる」と説明している。つまり、前述したように、依頼の前段階(前置き)で「発話の切り出し」の「けど」を使用し、相手の反応を伺いつつ依頼遂行を試み、これが依頼であることを相手に察してもらうように展開する。負担が大きい依頼では、このような談話の展開が多々見られた。「発話の切り出し」の後に「情報補足・断定回避」の発話が表れた例を以下に示す。

<表11> 例4

No.	発話者	発話内容	機能
2	JFB004	もしもし、<「JFB004名」ですけど><{<}。	発話の切り出し
3	JFO004	<はいはい><{>}。	
4	JFB004	<すみません><{<}。	
5	JFO004	<はいはい、どうも><{>}。	
6	JFO004	いえいえいえいえ。	
7	JFB004	急なお願いなんですけど,,	発話の切り出し
8	JFO004	おーおーおー。	
9	JFB004	えーとですね、今度の金曜日の25日なんですけど,,	情報補足・断定回避
10	JFO004	おーおーおー。	
11	JFB004	なんか、えっと、国立国語研究所というところで、(あん)なんか日本語の会話に関する研究のための実験とかいうのがあって,,	

4.2.2. 負担度の小さい依頼

黄(2015)で定義付けている依頼負担度の条件「時間」「移動」「金銭」において、「時間」「移動」の指定がない依頼は負担度が小さいといえる。負担度の小さい依頼で表れた「けど」を分析した結果は、以下<表12>の通りである。

<表12> 負担(小)「けど」

機能	内訳	前置き	本題	終結	計
情報提供	①事実を述べる	0	3	4	7(13%)
	②発話の切り出し	7	6	2	15(27%)
	③情報補足・断定回避	0	17	2	19(33%)
情報要求	④意見・判断を求める	0	13	2	15(27%)
計		7	39	10	56(100%)

(単位:回)

観察された「けど」を談話構成別に見ると、前置きでは7回、本題では39回、終結では10回表れ、機能別に見ると「情報補足・断定回避」が最も多く19回見られた。〈表12〉から、前置きで「発話の切り出し」以外の機能が表れなかった理由に関しては、黄(2015)で挙げられている「依頼における心理的負担」が小さい依頼であるためだと考えられる。「けど」が表れなかった発話は「なんかね、日本人の友達同士が、話しているものを録音、雑談を録音したいんだって」「友人との雑談を、録音したいらしい」のような伝聞表現が使用されていた。依頼談話で「けど」が表れなかった発話に関する考察は、今後の課題としたい。

5. まとめと今後の課題

本稿では、依頼談話における「けど」を機能と負担度の観点から考察した。結果をまとめると以下の通りである。

- 1) 「けど」の出現率を談話構成別に見ると「前置き」で最も多く観察された。
- 2) 前置きでは「発話の切り出し」の「けど」が、本題では「情報補足・断定回避」の「けど」が最も多く表れた。
- 3) 「けど」を機能別に見ると「情報要求」よりも「情報提供」が多く見られた。機能の内訳を見ると「情報補足・断定回避」が最も多く、続いて「発話の切り出し」「意見・判断を求める」「事実を述べる」順で見られた。
- 4) 意見・判断を求める「けど」は、前置きではほとんど見られず本題で顕著に表れた。
- 5) 依頼の負担度が大きくなるほど「けど」の使用率が上がることがわかった。理由は「けど」には依頼の負担を軽減させる機能が含まれているためである。
- 6) 負担が大きい依頼では「発話の切り出し」「情報補足・断定回避」が、負担が小さい依頼では「情報補足・断定回避」が多く使用されていた。

日本語母語話者は、依頼の談話展開の際に、前置きで「発話切り出し」の「けど」を使用しながら「話し手の発話が依頼であることを暗示的に提示」し、本題で「情報補足・断定回避」の「けど」を使用しながら「依頼に対する負担を軽減」させていることがわかった。

槌田(2003)では、依頼の「前置き」において情報提供の言いさし表現が多く使用

されていることを明らかにしていたが、本調査を通して「前置き」に加え「本題」においても情報提供の機能が多く使用されることが判明した。

また「けど」と共起する表現として「～と思う」や「～してほしい」などが見られ、「けど」が多く見られなかった発話では「～らしい」「～だって」などの伝聞表現を使用しながら聞き手に意図を伝えることが伺われた。しかし考察のためにはさらに多くの用例を集める必要があると考えられる。また今後は「けど」に前節する形式との比較や、男女差により使用様相に違いが出るのかということも追究していきたい。

【参考文献】

- 猪崎保子(2000)「接触場面における「依頼」のストラテジー-日本人とフランス人日本語学習者の場合-」『世界の日本語教育』10、国際交流基金、pp.129-145.
- 岡田安代(1991)「日本人は、なぜ文末まで言わないのか?-会話を成り立たせる『共話』の原理-」『月刊日本語』4、アルク、pp.9-13.
- 荻原稚佳子(2000)「日本人の言いさし表現に対する察しの現れ方」『講座日本語教育』36、早稲田大学日本語研究教育センター、pp.69-85.
- 何潔(2018)「言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察：男女差を中心に」『地球社会統合化学研究』9、九州大学大学院地球社会統合化学府、pp.37-48.
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析-依頼・要求表現の実際を中心に-」『日本語教育』79、日本語教育学会、pp.53-63.
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉(2009)『敬語表現ハンドブック』大修館書店、p.8、pp.100-110.
- キィ・ティダー(2004)「依頼しにくい場合の『依頼表現』」『早稲田大学日本語教育センター紀要』17、早稲田大学日本語教育研究センター、pp.71-93.
- 黄明淑(2015)「「誘い」談話の「承諾」場面の終結部における中日言語行動の比較：負担度が異なる2場面から」『言語文化と日本語教育』48、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、pp.22-31.
- 小池真理(2000)「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か:「依頼」の場面における母語話者の発話と比較して」『北海道大学留学生センター紀要』4、北海道大学留学生センター、pp.58-80.
- 白川博之(1996)「ケドで言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6、広島大学教育学部日本語教育学科、pp.9-17.
- _____ (2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版、pp.15-35.
- 曹英南(1998)「けど」で言い終わる発話の語用論的研究:場面における言いさしの「けど」を中心に」『言語文化と日本語教育』16、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、pp.81-83.
- _____ (2004)「言いさし表現に関する日韓対照研究」お茶の水女子大学大学院博士学位論文、pp.89-94.
- 植田和美(2003)「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析-語用論

- 的ボライトネスの側面から」『小出記念日本語教育研究会論文集』11、小出記念日本語教育研究会、pp.41-54.
- 田昊(2013)「「言いさし」の「けど」類の使用実態に関する一考察」『日本語教育』156、日本語教育学会、pp.45-51.
- 水谷信子(1989)『日本語教育の内容と方法-構文の日英比較を中心に-』アルク、p.56.
- 三井久美子(1997)「『依頼』のフレームの明示性について」『日本語・日本文化研究』7、大阪外国語大学日本語講座、pp.235-246.
- 三原嘉子(1995)「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』2、横浜国立大学留学生センター、pp.79-89.
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ-「てやる」「てくれる」「てもらう」を中心に-』明治書院、pp.254-255.
- 山本富美子(1989)「待遇表現としての文体」『日本語教育』69、日本語教育学会、p.89.

논문 투고 일자 : 2020. 05. 31.
논문 심사 일자 : 2020. 07. 20.
게재 확정 일자 : 2020. 07. 24.

< 要旨 >

依頼談話における言いさし表現「けど」に関する考察
 —機能と負担度に着目して—

小此木江利菜

言いさし表現とは、文末を最後まで述べずに発話をする日本語のコミュニケーション方法の一つである。本稿では、日本語母語話者の依頼談話から言いさし表現「けど」を取り上げ機能と負担度の観点から考察した。

観察された「けど」を「情報提供」と「情報要求」に分けて見ると「情報提供」が148回、「情報要求」が40回表れ、「前置き」「本題」「終結」部分で共通して「情報提供」の「けど」が多く使用されていることがわかった。機能別に見ると、前置きでは「発話の切り出し」、本題では「発話補足・断定回避」の「けど」が最も多く表れた。また、負担度別には、負担が大きい依頼では132回、負担が小さい依頼では56回表れ、依頼の負担度が大きくなるほど「けど」の使用率が上がることがわかった。理由としては「けど」には依頼の負担を軽減させる機能が含まれているためである。これらの結果から、日本語母語話者は、依頼の談話展開の際に、前置きで発話切り出しの「けど」を使用しながら話し手の発話が依頼であることを暗示的に提示し、本題で情報補足・断定回避の「けど」を使用しながら、依頼に対する負担を軽減させていることがわかった。

Review on Discourse Analysis of Requests on *Kedo* Interrupted Speech Expressions and Their Functions and Burdens

Erina, OKONOGLI

Interrupted speech expressions are one of the methods of communication used in Japanese to interact without finishing a sentence, through the use of by using utterances. This study focuses on the function and burden of expressions of interrupted speech, *kedo*, in Japanese native speakers' conversations. *Kedo* can be divided into two functions: providing information and requesting information. In this study, The researcher has observed 148 kinds of ways of providing information and 40 ways of requesting information were observed. Thus, It was found that providing information in *kedo* is more often used common than requesting information. Similarly, the use of introduction, body, and conclusion in a conversation was more present in providing information than requesting information. Furthermore, it appeared that the higher the burden of the request was, the higher the *kedo*'s usage rate augmented, varying from 56 at its lowest to 132 at its highest. The reason behind these results is that *kedo* has a function of can reduce the burden felt when requesting something.

From these outcomes, it was found that Therefore, Japanese native speakers can ease the burden felt by the other party to through the use of providing information and self-avoidance while using *kedo* when the discourse's body is being developed.